
 学 会 記 事

第 51 回新潟画像医学研究会

日 時 平成 16 年 7 月 3 日 (土)
午後 2 時～

会 場 東横イン (コープシティ花園
「ガレツ」4 階)

I. 一 般 演 題

 1 下肢閉塞性動脈硬化症におけるテーブル移動
造影 MRA の問題点：静脈描出の影響につ
いて

木村 元政・橋本 望・尾崎 利郎
皆川 有弘*・高橋 信平*

新潟大学医学部保健学科
立川総合病院放射線科*

1 回の造影剤投与で広範囲を撮像できる利点を持つ、テーブル移動造影 3D-MRA を用いた下肢閉塞性動脈硬化症の診断における問題点について検討した。使用装置は SIEMENS 社製 1.5T MRI MAGNETOM SYMPHONY で、撮像シーケンスには 3D-FLASH を用いた。Care bolus 法により造影剤が下行大動脈に到達した時点で撮影開始し、腹部・大腿部・下腿部をそれぞれ 20 秒で撮影した。得られた画像を動脈描出・静脈描出・総合評価を 4 段階で評価した。術前症例 47 例では、動脈描出については至適な撮像タイミングであったが、下腿深部静脈描出による診断能低下例が 7 例 (14.9%) に認められ、今後撮影時間の短縮などの検討が必要と考えられた。

 2 肺塞栓症と深部静脈血栓症との関連：自験例
における MDCT での検討

吉村 宣彦*・堀 祐郎・高野 徹
尾崎 利郎・笹井 啓資*

新潟大学医歯学総合病院放射線科
新潟大学大学院医歯学総合研究科*

【目的】肺塞栓症 (Pulmonary Thromboembolism: PE) と深部静脈血栓症 (Deep Vein Thrombosis: DVT) との関連を、特にヒラメ静脈に注目し、MDCT により検討する。

【対象】PE・DVT の有無を評価する目的で MDCT を施行された 134 例。

【CT 装置】GE 社製 Qxi α (4 列)。造影剤は 370mgI/ml 100cc。造影剤注入は原則右肘静脈より 22G 留置針。撮像開始は、肺が 15 秒後、腹部骨盤・下肢：3 分～3 分 30 秒。ワークステーションにて血管内の filling defect, 分枝の途絶を評価。

【結果】134 例中評価可能例 130 例。DVT は 43 例、PE は 33 例。PE 33 例中 DVT 合併 29 例。ヒラメ静脈 (+)・肺塞栓 (+) は 12 例のうち 5 例はヒラメ単独血栓。

【考察】今回の検討ではヒラメ静脈血栓単独でも PE を発症した症例が 5 例存在した。このうち 1 例は PE の血栓量が多く、慢性反復症例と考えられた。PE・DVT 症例では下腿の検索が重要であり、MDCT はその診断に有用である。

 3 CTN (Central Test Node) を DICOM サー
バとして利用した遠隔画像診断システム

小田 純一・椎名 眞・関 裕史
國井 亮祐・高橋おがわ・吉嶺 文俊*
県立がんセンター新潟病院放射線科
県立津川病院内科*